



1981-6

No. 153

【表紙】

椋の森の道

ヤコブ・ファン・ロイスダール

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

截金——仏画から工芸へ……………斎田梅亭 4

上田墨縄堂の事ども……………上田淑宏 6

文化行政について思うこと②……………安達健二 10

随想

西ドイツ・アメリカの埋蔵文化財保護瞥見…坪井清足 14

文化庁ニュース

昭和56年春の勲章受章者決まる……………16

昭和56年春の褒章受章者決まる……………16

著作権審議会第32回総会開催……………16

昭和56年度都道府県宗教法人事務主管課長会議開催さる…17

史跡の指定等……………17

国宝・重要文化財(美術工芸品)の指定……………18

美しく豊かな言葉をめざして……………19

募集 舞台芸術創作物品……………20

資料

昭和55年度民間芸術等振興費補助金の交付状況について……………22

解説

宗教法人の管理運営の適正化……………安藤幸男 24

海外文化行政事情シリーズ⑫

ドイツ・韓国の文化行政……………松野 精 26

国語シリーズ② 「語法」に関する問題

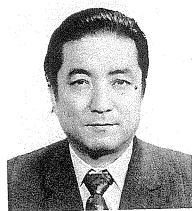
29

新設法人紹介

(財)日本金属造型振興会 21
(社)美術愛好会サロン・デ・ボザール

祭礼歳時記シリーズ⑭ 28 国立劇場ニュース 31

上田墨繩堂の事ども



上田 淑宏

(遺定保存技術美術工芸品保存桐箱製作保持者)



現在私共の屋号と成っている「墨繩堂」は、生家の菩提寺(宗猷寺)に山岡鉄舟氏の御両親のお墓が在り、祖父が檀家総代をしていた関係で、山岡鉄舟氏にお願いしてつけて戴いたものです。これは万葉集で飛騨匠を詠んだ「かにかくに物は思はじ飛騨人の 打つ墨繩のただ一道に」の歌よりとられたもので、またその時に同じくつけて戴いた師巧齋と言う雅号を併せて使う様に成ったわけです。

私は大正十四年、大塚にて二男四女の長男として出生しました。父の私に対する後継ぎの夢は異常なほどに強く、さらに修業するにあたって年齢が若い程良いと信じていたため、あえて高等小学校へ行かれました。しかし、高等小学校の内容が尋常小学校とさして変わらないと知ると、わずか一学期で中退させられるはめになりました。当時の修業は明治の徒弟制度そのままです。物指と定木でたかかれるといった厳しい思いでした。こうしたいわば少年時代の苦しい思い出もある修業を経て、そろそろ一人前になり、

昭和十九年に陸軍高射砲隊に入隊しました。終戦復員後、父と異なる指物「春慶漆塗の木地細工、桜、桑を主体の和家具調度品の指物」を習いに住み込み修業に出掛け、昭和二十六年に現住所に独立しました。

独立した頃より、戦災で材料、道具の総てを一夜にして失った職人の弱さは忘れられなかった。私は、刃物に、砥石に、鉋、鋸にと良い道具を揃える事に努力しました。良い鍛冶屋が居れば菓子箱持参で頼みに行き、何年でもじっと待つといった具合で造って貰いました。道具販売店へ行けば何でも揃う時代ですが、一度直接に鍛冶屋に注文して造られる道具を使ってみれば、その切れ味は比較するもおろかな事です。鋸鍛冶も、播州、越後、諏訪とあり、私は色々使ってみて諏訪鋸が桐材の細工にはその鋼の精度や焼入れの堅さ等が適していると判断し、以後諏訪を専ね、若手で熱心な者を探し出し造って貰ってから三十年経ちますが、その鍛冶屋の造ったものはいつも同じような出来をみせてお

を探し出して買入れ来てたりしております。漆は生産地より小売市場迄、昔より複雑な流通経路があり、産地に向いて仕入れても決して安くなく、ただ、混ぜ物が無い良質の日本産という事でこれだけの苦労をしています。塗り上ったものの良さは私共にはよくわかって、果たして何人の理解を得られるか疑問で、漆塗りを汚れ止め程度に思っている人も少なくありません。私共には三人の塗師に仕事を頂いて

いますが、代金も上と下では三倍と違いがあり、それも一目では、それだけの違いの判る人はまづおられません。この上物塗師は、磨きを使う角粉(鹿)も、人を介し、関西のお寺からその年に切った鹿角を分けて貰い、自宅で三尺角の囲炉裏で蒸焼きにして造ったものを使っております。真田紐も今では造っている家も一軒になつてしまいました。それも年々需要が少なくなるばかりです。戦前は真田紐を造っている家も数多く、紐も絹糸が十分打込まれているため結んでも腰があり、ピンとしていたのですが、戦後は大部分が率の良い帯止め紐や羽織紐、刀の下緒紐といった複雑ながら高価で数売れるものを作る方へ、いわば転業に近い転換をしてしまいました。せめて私共だけでも昔に近い紐を使い、色を定め、横糸(棉)に一本ずつ縫りを入れさせ、紐に強さをださせ定期的に注文しております。注文は一卷百尺を三巻宛とし、紐も三分より一分増で一寸迄八種類、色は四種類に分けて致しますが、一ツの保存箱に六尺から十尺位しか使用しませんし、紐なしの保存箱もあり、現在箱以外に使い道のない真田紐の先々

には心痛む思いが致します。私共も相当量の在庫があり、紐のための桐箱を造った次第です。桐箱作成にかかせぬのが木釘で、これは昔、修業の段階で、仕事の初歩に朝から晩まで削られたものです。関西の一部では今でも自家製を使っている所が有るようです。関東においては、江戸時代幕府の牧場だった現在の千葉県柏市豊四季地方が明治時代に開墾地となり、元武士が入植したが思わしくなく、副業として始めた木釘削りが定着しました。箆筒、和家具、箱と需要も多く、一時は一村約六十戸のほとんどが木釘造りをしていました。しかし、昭和三十年頃から接着剤の進歩と洋家具の進出、桐箆筒の後退で需要も少なくなり、また東京のベッドタウンとなり、地価が急上昇して、土地で得たお金を資金に木釘の量産する機械も工夫され、箆筒等に使われる大きい釘はこれらで造られるようになりました。しかし、軸箱、刀箱等の保存箱に使われる細かいものは機械では造れず、小刀で昔通り造らねばなりません。このようにして

いる家は数軒しかなく、それらの人も皆五十歳以上になり、若い人は一人もいませんし、息子がいても仕事が単純すぎて根気だけを必要とし変化がないためやらず、後継者がいない現状です。木釘の原料は「卯の花の匂う垣根にほととぎす早やも来鳴きて」の卯の花(ワツキ)で、房州夷隅郡山間部と伊豆大島の一部に群生するものです。しかし、主に国有林内の事なので、山の手入れの名目で役場で手続きして許可をとり、人夫をトラックに乗せ山に入り、山の斜面に群生しているものを稲刈り鎌で(立木の時は水分が

ります。このようにして使う道具類に苦勞して優れたものを求めるのは、道楽や趣味ではありません。戦前には名人道具を選ばずという言葉が悪いからだと言われ、その分を着物や下駄に金を掛けるものがあります。また桐下駄の柱目が十八本位あるものが粹であるとして、作りたりすることが流行し、昭和十五、六年頃迄、主に居職(家の中で仕事する職)の間でよく言われてきました。しかし、戦後道具を失い、再び求めるために色々見聞しているうちに、競争を境にして年季の入った鍛冶屋、道具造りの職人の多くが職を離れたり廃業して去り、現在の鍛冶屋も鋼の材質を知り、また使う用途に依る焼入れ程度をわきまえている者が非常に少なくなっていることがわかりました。後継者のためにも正しい道具を残すという事は大切なことですが、自分自身が良い仕事をするためにも吟味された材料と優れた道具が必要である以上、こうした現象はまことに残念な事であり、指物師の仕事はその範囲が広く、美術品の保存箱を始め、調度品の造り、また損なわれたものの修理、果ては家の新築の相談と種々に亘っています。その用を果たすためにも色々な職種の人々と知り合い、その人達の協力に依って今日迄無事仕事を進めて来る事が出来ました。その中の一人、漆塗師について申し上げます、普通塗師は都内の漆間屋で漆を仕入れているのが大部分ですが、この人は純日本産漆が良いと遠く岩手迄行って仕入れ、また人伝にて茨城県奥で漆が取れる話を聞けば、尋ね尋ねて場所

非常に多いので、挽くというより刈るという感じで伐採して持ち帰り、束にして土中に埋めておき、使う量だけ出して釘を造るというものです。戦前は価格も米一升釘一升と決っていたのですが、今は前記の如く削る人が少なくなった上、更に、希少価値として雑誌などの記事になった事もあり、この頃は全国より注文が来るようになり、価格も平均一升で三万円から一番細いものは五万円以上ものも珍らしくあります。毎年注文していますが、同じものでも少しづつ値が上がって来ます。私共は、削られて来た木釘は、アクを取り除くために大きいバケツで水に漬け、毎日水を取り替え、これを泡が全然出なくなる迄三十日から五十日位続け、後にこれを日光に約一か月さらし、カラカラという音がする迄干し上げ、これ以上木やせがなくなつた状態にして数年間蓄えて置きます。万一アクが残ったときは釘が数年で灰黒くなり、指で曲げても折れる程にもろくなり、使う事ができなくなります。

指物師の使う木材は桑、桐、柿、桜、檜、朴と種類が多いのですが、それも選び抜いた良材を少量しか使わないという事に難しさがありません。私は桐材を使う事が多く、桐の木や鉋くずの中で這い回って育つた私には、桐の木がもっとも親しみ易く、もっとも尊敬しているものかもしれません。桐の木は日本全国にあり、加えて東京以北の東北地方を主産地として、会津、南部、三陸地方のものが高級品としてその材質の良さが知られています。山元(山持ちで桐の植林を専業として代々伝わっている者は親代

々申し伝えに依つて、親の植えた木を子が伐り、子の植えた木を孫が伐るといったやり方を守つております。日常は山の手入れの他はこれといった仕事を持たず、財があるため株相場などしており、経済の見通しなどは、山奥に在りながら東京の桐材問屋筋よりも明いことがあります。数年前のオイルショックのような不安定な経済状態の時には、桐丸太が腐るものではないこともあり、東京には一年間一本の丸太も出荷せず、価格の安定を待つといった具合でした。また職人が何人かで金を持ち寄り、良い桐丸太欲しさに山元へ行つても相手にされず、むしろ東京より高値をつけられてすこすこと帰つて来た事もあるようです。山元が東京へ集金に来る時は、外車でホテル迄来てジャンパーにビニール靴という姿に着替え、桐材問屋へ歩いて顔を出すと、いった芝居をする術を、親よりのいい伝えとしてかたくなに守り通し、それが十分通じる所に桐材を求め難しき一端がうかがわれます。桐の木は秋すっかり葉が落ちきつてから根元より伐り倒しますが、戦前は土を二尺位掘り下げて伐り、根元の張つた所は一尺二、三寸位に切り取り、これで桐丸くり抜鉢を造り、高級品として売つたものでした。特に大きいものは蒔絵を施したりしてありましたが、今日では暖房器具の発達と生活様式の変化で、もはや現役で火鉢造りの出来る職人は一人もいなくなりました。

このようにして伐り倒した桐丸太は、その場所まで横にして雪を待ちます。十二月から二月頃、十分に雪が降り積り、下の方が根雪と成つて凍

私共のように伝統に依る技術工程を修得するためには、一生懸命に習つて一通り出来るようになるのに五、六年かかり、材料の選別から仕上げまで一人でやるようになるには最小限十年は要します。徒弟制度に昔の厳しさを欠いている現在では、高卒で五年程すると二十三歳となり、本人も第三者も一人前になつたような錯覚をするようです。それだけに、更に五、六年、熟練するために同じような仕事の繰り返し、マンネリに思えるのか、本人の技術はそうすることで進歩はゆるやかな坂道を登るようになつて行くのですが、案外自覚もなく、また仕事以外にもなやむ年頃で、中には挫折して去つて行く者もあります。

技術と知識の双方をバランスよく身につければ、これは素晴らしい事です。先人達が年をとると、やがて次の世代がそうなることをがいた職人の理想像かも知れませんが、一方が抜き出た時、特に知識があまり先行し過ぎると頭で分かつていて手が動かないという事にもなりかねません。職人の家に生まれて学校を出るといふ事は、恵まれた環境にあることであり、それなりに親の願望であり、本人も或る程度の自覚をして進んだ道とは申せ、なかなか難しいようです。職人には技術以外の心掛けと申しましようか、毎月一日と十五日の紋日の過し方、身の潔め方、先輩への礼、職方への接し方など列記すれば数多い事柄があり、これを軽んじると、落ちれば歯止めを総て失つた如くになり、誰も手を伸べてくれず、自分で這い上る他はなく、またその原因も分らずに人生を終る人が多いようです。

つてから、ソリに乗せトラックの通る道までおろして来ます。この作業が全部人の手で行われ、他の木材のように驚くは全く使いません。桐は丸太の時は水分が多く、樫や松に匹敵するといわれる程重いのです。橋のなかい川では浅い所を多くの人が肩にかついで渡るそうで、この山出しの費用に依つて丸太の単価も相当上との事です。また一時期、尺貫法禁止を機会に、伐り出された桐丸太が立方米で売買されるようになったため長さが一種単位で値がつくので根元の張り出した部分も値をつけ、上は枝の下迄一杯に伐つて出荷されて来るようになり、姿の悪い丸太が問屋に並んでおりました。これらを私共が求めても結局は後先を切り捨てるので、それだけメートル法で職人が損した時代がありました。しかし、数年前より以前のような値のつけ方が復活して来ました。

丸太の標準は、年輪目の少ないものを長さ六尺六寸に、年輪目の多くあるものは六尺三寸に伐つてあり、年輪目の少ないものは丸挽きといつて、端から全部同じ厚さ、同じ方向に製材します。これが筒木目が出る板目板といわれます。年輪目の多いものは梨割りと言つて、丸太を先ず十字に挽き四ツにします(これを普通三角材と称しています)。この三角材をアキ抜きするために根元の方を上にして、北側の水ハケの良い所に立てかけて二年以上雨にあて(これを二入梅と言つ)、一月から三月頃迄に順次必要に応じ、また目通り、年輪の数に依つて四分より八分位の厚さに挽き、春先の雨にあてた後十分乾燥させます。このアキ抜きは自分でやらねば安心で

昔より今日迄、職人の間の願ひにも似たものに、別収入があつたらという言葉があります。これは世相が不況な時などくに話題になっております。これはらくをしたいとか、美味しいものを食べたいと言ふ事ではなく、少しでも余分な材料を仕入れたい、生活に心配なく仕事が出来たら、と思つての事です。中に少数の人達が、地の利を得たり、また内儀さんに副業的技術があつたために、踏切つて何らかの別収入を得ている人があります。これらの人達は一見しては経済にゆとりも出来、心豊かに仕事が出来るので、理想的にみえますが、それらの人を見ていますと、やがて仕事に銳さが消え甘さが目だつて参ります。

よく人生を山登りにたとえる話がありますが、仕事をすすめる事もまた同じと言えます。若い時は登り道の連続で、わき目もふらずただひたすらに進み、やがて年をとつて四方を見渡すゆとりも出来、ここで永い経験により得た技術と考へ方を発揮した仕事が出来ようになるものと思ひます。仕事を長く続けて来た人達は無駄話は好んでしても、仕事の話はつかれるのが(相手にわかるように)話さないようにする人が多いのですが、若い人達がもつと話の聞き上手になれば、先輩より得難い体験話など貴重な事を知り、やがてそれが自分の血となり肉となり進歩して行くのではないかと思ひます。

以上ここに私の生い立ちと、四十数年の間私の手となつた色々の道具の事、また仕事を通じて知り合った職業の違う人達の事を書き綴りましたが、私のこれ迄過した年月は、戦争に依つて

きないものです。もしも、アキ抜きが完全でない板で箱を造つた場合、数年たつと鼠黒色の様な斑点が出たり、柾目が何本か黒くなり、箱も狂いだし、底板の場合、虫の発生をみることもしばしばです。この板造りは非常に難しく、自分が納得する迄しなければ意味がない事です。普通、町の画商や表具師に納める桐箱を造っている人達は、桐板の柾目通りが良く、品物が入ればそれでよしとします。数日で第三者に渡り、再び見る事もないからです。この人達の桐材仕入は非常に楽なもので、丸太は敬遠し、問屋に一坪から二坪単位で結束してある板を買ひ求めて箱を造つております。この様な板は、前記のようなアキ抜きもしておらず、湿気すらあり、数年を待たずして損なわれるのも自明な事です。この様な箱を造つている人達も少なく、自立している者では五十六歳の私が一番若く、四十歳から五十歳の人は見当たりません。また現在専業としている家は五指に満たず、後継ぎが一緒に仕事をしている家は更に少なくなります。

このように、バトンタッチがうまく行かなかつた原因には戦争もありますが、もう一つの原因として、現代画家の作品が大部分額装になり、書とか図柄が縦長の絵である場合に初めて軸表装され、桐箱に入れられるといった需要の後退が拍車をかけたように思われます。また、複製工芸版通信販売等に必要なる量産的なものは、現在埼玉県春日部地方に在る桐箱造りの職人が、桐箱の売れ行き不振のために、見よう見真似で掛軸箱を造つたものが出廻つているようです。

物事に選択の余地がなく、好むと好まざるに関わりなく、世の中が激しく変わり、仕事以外に生きていく術を知らぬ私には、ただただ仕事をし、仕事の内に生き甲斐を見つけ、ひたすらに一つの道を進む外はありませんでした。戦災により、無一物より出発した私にとっては、道具一丁求める事が出来た時、また余分に桐材を仕入れる事が出来た時など、なんともいえない喜びに浸つたのですが、今もって初心を忘れないうちに、自分自身のいましめに致しておりました。倅二人も私の後に続き、もくもくと仕事に向つておりますが、私は倅達に仕事を押しつける事なく、自発心を大事にし、うまく行かぬ時は何度でも、同じ事を繰返しやらせ、大きい失敗よりも小さい間違いを厳しく叱り、仕事が終れば何でも話し合い、決して物事は一人で決めず、家族で話し合つてから決めるといつた方針を持って来りました。

今回はからずも選定保存技術の認定を戴き誠にありがたい事と存じております。と共に、自分の今迄歩んで来た仕事に対する姿勢がこれで決して間違つてはいないからではないと思ひ、何かほつとした気持でいるこの頃です。

残された半生は、倅を含めた若い人達に、物を造る意義と、良いものを造るには材料と道具だけでなく、自分自身の平常の心構えが大切である事など、機会ある毎に教へ伝え、灯りを消すことなく後世に委ねる事を生き甲斐として過して行きたいと思つております。

(うえだ よしひろ)

編集後記

○本年四月、重要無形文化財に鍍金が新たに指定され、この保持者として齋田梅亭さんが認定されました。鍍金の技術は仏画、仏像等の莊嚴、加飾の技術として藤原・鎌倉時代に盛行し、今日まで伝承されてきた美術工芸史上貴重なものとして、技術保存の必要性が高いとされています。齋田さんは、技術を磨くかわらぬ鍍金の工芸品への応用など保存振興に努めてこられました。去る六月一日急逝されました。生前の御功績に限りない敬意を捧げ、御冥福をお祈りします。

○また、選定保存技術の保持者に追加認定された上田淑宏さんに、美術工芸品保存桐箱製作の現状等について書いていただきました。上田さんは、十三歳頃から父親の指導を受け、製作、修理等に従事しています。永年にわたり技術を磨き続けてきたお二人の言葉には、強く訴えるものがあります。

(○)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きよせい 営業課
TEL(0)3(3)681-2141(代表)

「文化庁月報」六月号

昭和56年6月25日印刷・発行
編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きよせい
〒106東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所 〒106東京都新宿区西五軒町52番地
電話(0)3(2)681-2141(代表)
振替口座 東京 91161番
印刷所 (株)行政学会印刷所

年間購読料 二、一六〇円(送料共)
定価 一八〇円(送料四五百)